

テクリードCフロアブルの使用に関する注意点

【種子消毒】（水温が上がる4月上旬より開始）

- ①水温が8℃以下と低い場合は、休眠性が逆に深まる場合があるとともに、発芽の不揃いを助長する恐れがあるため水温の確保には十分注意する。
- ②同一の容器（オケ等）に異なる品種を入れて消毒しない。
- ③種子重量の1.5倍～2倍の薬液量、水温10℃～15℃、濃度200倍、24時間で実施する。

1 : 1.5 ~ 2 1.5 ~ 2

※ 使用量例 種子 100 kg:水 150 ℓ ~ 200 ℓ 薬剤 750ml ~ 1 ℓ

- ④消毒～催芽中は容器にフタをする。
- ⑤この剤には銅が含まれているため、金属部分の腐食が懸念されることから消毒時にハトムネ催芽機は使用しない。

〈水温が低い場合〉

ハトムネ催芽機等で水温20℃～25℃程度の“ぬるま湯”を作る。“ぬるま湯”を種子消毒する容器に移し替え、「テクリードCフロアブル」を200倍で希釈する。その後、容器にフタをして24時間浸漬する。

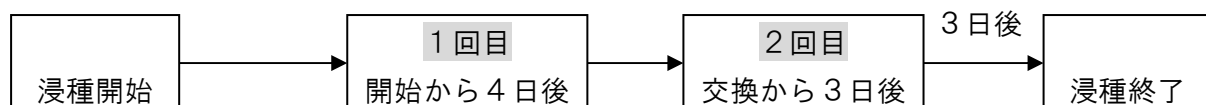
〈もち品種の温湯消毒について〉

もち品種は温湯消毒によって発芽率が低下しやすいため、温湯消毒を控えてください。

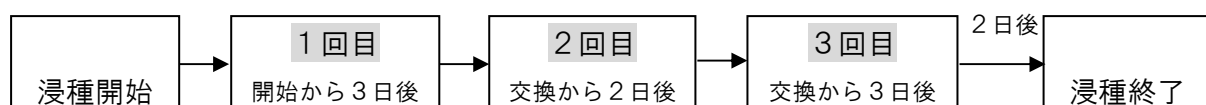
【浸種】

- ①同一の容器（オケ等）に異なる品種を入れ浸種しない。
- ②浸種の粳と水量との容量比は1：2程度とする。 例：種子 100 kg:水 200ℓ
- ③浸種時は消毒時と同様に“ぬるま湯”から開始する。気温の低い日が続く場合は、水交換の際に“ぬるま湯”を足すなど、水温を確保するのが望ましい。
- ④水の交換回数は控えめにする。目安は10日間で2～3回程度、1回目の交換までの日数を長めにする。

（交換のローテーション例・浸種10日間の場合）



（高温浸種時のローテーション例・浸種10日間の場合）



※昨年のように浸種時の気温が高い場合、水交換が少ないと酸欠により発芽障害が懸念される。また温湯消毒の場合についても、粳の呼吸が活発になるため、酸欠に注意する。特にエコホープDJ等、微生物資材を使用している際は微生物も呼吸し酸素を必要とするため2日に1回程度、水交換をすること。